資料3

「低炭素社会づくり」長期ビジョンについて

株式会社クレアン　薗田綾子

2007年10月3日

クレアンのプロフィール

- 設立　1988年8月
- 社名は「クリエイティブな起業家」というフランス語からの造語
- 本社：大阪
- 売上高：5億8800万円（2007年1月期）
- スタッフ：40名
- 事業内容：CSRコンサルティング、CSRコミュニケーション
  （環境報告書、CSRレポートなど制作実績　のべ350社）
  http://www.cre-en.jp/
- ビジョン

2020年に向けて、事業を通じて地域、国という枠組みを越えた地球と人、人と人がつながるサステナブルな社会を実現します

今のままでは、持続不可能・・・

地球温暖化やオゾン層、生態系破壊の問題をはじめとする地球規模での環境問題が日々深刻になっています。途上国での飢餓貧困層は増え続け、南北格差は広がるばかりです。

さらに、日本社会でも、いじめや躁鬱病、メタボリック症候群などの多くの問題が山積し、自殺者も3万人に及ぶ現状で、この延長線上には持続可能な社会はありえません。現実世界は、サステナビリティに向けて進むどころか、最悪の事態となりつつあることを再認識する必要があります。

ライフスタイルと価値観の転換

素晴らしい環境技術の登場やこまめな生活も重要ですが、タイムリミットが近づいていることを踏まえた上で、地球温暖化の問題は人類の生き残りをかけたサバイバルテーマであることを自覚し、早急にライフルタイルと価値観の転換を図ることが日本に求められています。

「2050美しい星」を国民コンセンサスに

「強く思えば、願いはかなう」「自分がそうなりたいと思う気持ちが強ければ強いほど、明確であればあるほど現実となる可能性が高くなる」＝人の意志の力が大きな夢を実現する原動力となります。

反対に、その理想像など実現できないかもしれないと思った瞬間に高い壁ができてしまい、実現はとうてい不可能となります。

もちろん、自分のためだけの想いではなく、多くの人と共有できる理想像に近いものであればあるほど、多くの人が共鳴し、強い共感を得ることができます。

持続可能な社会づくりの長期ビジョンは、多くの人が幸せになれる理想像に近ければ、多くの人が共感して、大きな力となり、一人ではとても実現できないような大きなことも、きっと実現できるでしょう。

「低炭素社会」の幸せのイメージは？

●環境面だけではなく、社会全体のビジョンが必要達成したいと思わせるイメージが重要です。

「低炭素社会」だとその暮らしのイメージがわかないし、楽しさが見えてきません。

●ビジョン（あるべき理想の姿）が共有できなければ、せっかくのイメージも、絵に描いた餅となってしまい、達成へのモチベーションが高まりません。

例）地球と共生する幸せ社会＝「エコハーモニー＆ハッピー社会」「エコニコ社会」など、楽しさを感じさせるキーワードに。

クレアンの考える「2020年のサステナブルな社会」の具体的な姿（事例）

（ｸﾚｱﾝ2020年ビジョン具体化プロジェクトより）

■ 人々の価値観

＜社会を支える規範的精神＞

- 物質的な豊かさよりも精神的な豊かさが尊重されるとともに、人を含めた全ての存在に思いやりを持つという価値観が共有されつつある。
- 自然との調和を大切する「環（わ）の心」が尊重され始めている。

＜社会規範＞

- **人間中心の考えではなく、自然との調和を基本とする社会規範が構築されている。**
- 自己選択・自己決定・自己責任という原則に基づいた市民参画型の社会が構築されている。
- 自立した個人による「協力社会」をめざす姿勢が一般化している。

＜経済的価値観＞

- **お金よりも時間・文化・美・自然などに豊かさの価値が置かれている。**
- 社会的・文化的・環境的価値が経済的価値として適切に評価され、これが価格に反映されている。
- サステナブルな活動が長期的に見ると社会全体の利益に繋がる、という認識が一般化している。

＜日常生活を支える暮らしや幸せの価値観＞

- 無形物（地域文化など）も含めた「もの」を大切にすることと共に、毎日を心豊かに楽しく暮らすというライフスタイルが一般化している。
- 暮らす上で必要な基本的な営み（「食べる」ための一部食糧の生産　など）については、できる範囲内で自ら行うことが一般化している。

（続き）

■ 産業・企業

- **企業経営全般へのステークホルダーの参画が一般化している。**
- **大企業だけでなく中小企業においても、「CSR」や「SRI」という言葉が意識されないくらい一般化している。**
- 企業の多くが、一般市民や社会をサステナブルな方向にリードするような存在になっている。
- 多くの製品で受注型生産が行われている。

■産業関連インフラ

＜エネルギー＞

- **地域の特性に合った自然・再生可能エネルギーが普及している。**
- サービスステーション等を基点とした地域へのエネルギー供給システムが整備されている。
- 余剰エネルギーを有効利用するシステムの整備が進んでいる。
- 生きるエネルギー（農耕馬、人力車など）が再評価され、一部利用され始めている。

＜資源＞

- **4R（repair-reduce-reuse-recycle）がほぼ実現している。**
- 廃棄物情報がネットワーク化され、廃棄物を資源として再利用する市場が成立している。
- 再生可能資源の優先利用が当たり前になっている。
- 少量廃棄のための少量生産、少量消費が当たり前になっている。

＜物流＞

- **社会・環境コストが物流コストに上乗せされている。**
- 経済全般に地産地消化が進み、基本的に「できるだけ物を動かさない経済」が発達している。
- 社会全体での環境効率を考えた物流が実現している。